

DYING MESSAGE

written by HADEYA

1

彼女は笑っている。いつだって笑顔だ。笑顔で下らない会話を交わす。本当に下らない会話を。

その日も俺と彼女は下らない会話を交わしていた。早朝のストリートで。

毎朝の日課であるメールチェックを終え、下らない会話を交わしながら近所の川原を散歩する。

「今日は何が起こるか楽しみなんでね。エースは何が起こると思いますかね？」

「俺は———」

取るに足らない会話。だが、シュシュとの会話は楽しい。最高に楽しい。

彼女といると、俺は……幸せになる。何故か。俺たちが〈純粹〉だから、だ。

毎日が楽しい。俺たちは裕福な生活を送っている訳ではないが、幸せだった。

2

事件は突然、起きた。仕事を終え、帰宅すると彼女が仰向けに倒れていた。

白いナイキのTシャツは赤い染みで染まっている。刺されたに違いなかった。

「シュシュ！」

彼女を抱きかかえる。途切れ途切れの声で彼女は告げた。

「後ろ……」

背後を見た。刃物を手にした男が立っている。カルト———売れっ子小説家である俺のファンだろう。

俺と彼女を逆恨みしたに違いない。

そいつは背後から俺の首筋に刃物を突き付けながら新作を執筆するよう命じた。

今、あなたが読んでいる小説が、それだ。

3

愛を綴ろうと思った。人生の意味を綴ろうと思った。迷った挙句、俺が書いたのは今朝の川原での下らない会話だった。

「今日は何が起こるか楽しみなんでね。エースは何が起こると思いますかね？」

「俺は———」

取るに足らない会話。だが、シュシュとの会話は楽しい。最高に楽しい。

彼女といると俺は……幸せになる。何故か。俺たちが余りにも〈純粹〉だから、だ。

「———今日も退屈な一日になると思う。暫くは退屈な日が続くんじゃないかな」

「腹が減ったんでね。今朝のカップ麺はシーフードヌードルで決定なんでね」
「さ、家に帰って、シーフードヌードルを食べるとしよう」
……そこで「待て」と言われた。カルト野郎から。執筆を中断した。せざるを得なかった。
「もっと刺激的な会話にしろ」
野郎は言った。俺は……従った。と言うより、元から従っていた。

下らない会話の中に潜む芸術性。それこそがペーパーバッグの本質だからだ。

4

目に映るモノは何でも書く。聞いたモノ、考えた事、何だって題材に出来る。
ペーパーバッグは最強の芸術形態であり、俺はペーパーバッグで稼いでいる。

この後、俺は刺されて死ぬのだろう。床に転がっている彼女———シュシュミたく。
最期に彼女へのダイイング・メッセージを伝えようと思った。彼女が一命を取り留めた時の為、彼女が再び俺の小説に胸トキメかせる為に。

「俺は早朝が好きなんだ。川原が好きだし、日々の生活も食事も何もかも好きだ」
そう、俺は何もかも好きだ。人生が好きだし、朝焼けの太陽が好きだ。シーフードヌードルが好きだし、退屈な生活も大好きだ。何故か———

そこに君がいるから、だ。

君のいない生活は想像が付かない。俺たちの会話は下らない。でも、そこには輝きがある。
その根底にあるものは何だと思う？ その芸術性は何だと思う？ 一つしかあるまい。

愛、だ。

愛してる。君を。君の全てを。君との会話は下らない。けど最高に刺激的だ。
いつだって俺たちは下らない会話を交わしている。でも、それは俺にとって本当に重要な事なんだ。本当に、本当に重要な事なんだ。

朝焼けが好きだ。道を行き交う車が好きだ。この街が好きだし、この川原が好きだ。
いつだって、そこには君がいる。いつだって君は元気一杯、俺を祝福する。いつだって君は俺を支えてくれる。

光あれ、君と俺の生活に。この幸せが永遠に続———

背後から首を刺された。俺は死んだ。この作品が完成する事はなかった。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872